都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問いあわせは

都留文科大学附属図書館
住所：402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話：0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

電子紀要トップへ

『栄花物語』における人物呼称

Address Terms of the Characters in *Eiga Monogatari*

加藤静子
KATO Shizuko

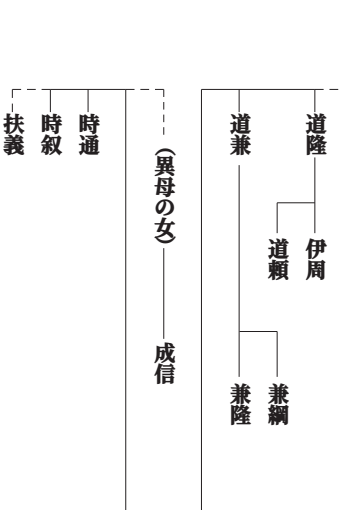
はじめに

史上の実在人物が多く登場する歴史物語では、多数の人物をどのように定位することで物語っているのであろうか。人物提示のあり方および呼称は、同じ歴史物語でも、編年体と紀伝体とでおのずと異なってくるし、描かれた作品内年時と執筆年時との差によっても違ってくるようである。[1] さらに、物語中に物語る〈場〉をどのように形成していくかによっても、多様で固有な様相がうかがえる。この稿は、前稿「実在人物の提示と呼称―枕草子・紫式部日記を介して栄花物語を読む―」（『国文学論考』平成10年3月）にひき続いて、『栄花物語』の呼称について、特に道長を中心に考察したものである。

『栄花物語』正篇三十巻において、年紀が記されてからでも六十年間が物語られ、登場人物がおおよそ五九〇人、そのうち男性は約三五〇人いるが、編年体の宿命で官職を帯びる男性官人は、随時、呼称表現を変えていかざるをえない。前稿では、「絶対的避称」（人物を実名で指示せずに邸宅名や官職名で表現する敬称）という観点[2]から見て、『枕草子』『紫式部日記』では、彼女たちの宮仕え先の家関係者に行われていること、その絶対的避称の及ぶ範囲を確認して、『栄花物語』にあてはめて臣下の身分で絶対的避称が守られている人物関係を整理した。すると、次ページのようにきれいな一系図ができあがった。[3]

こうして系図を見ると、道長を中心として彼の同母兄弟とその主だった子供たち、そして道長の子供たち、道長正室倫子と次妻明子の兄弟の一部という範囲になる。これは、たとえば、加納重文氏が正篇の記事を分類し、登場人物を登場回数から数量化して示して、栄花物語を「いわば道長世界における女性見聞物語」とし、その道長物語の素材圏としての道長世界は、「道長とその父母・姉妹・子

［系図］（　）内は対象外の人物



女を大中心とするが、その外圏に、中関白家世界・三条院世界・公任世界といった小中心を持ち、さらに群少の諸々も含めて、何らかのところで道長に結びつくものといったものである[4]」と結論づけたが、そのような物語世界を絶対的避称という呼称面からも肯定することができるわけである。呼称という小さな表現から見ても、道長を中心核とする物語であると主張しているように思われる。

前稿では、また、『枕草子』『紫式部日記』両作品において、単独の「殿」呼称は、作者清少納言や紫式部が宮仕えした女主人の父親である道隆や道長にしかなされていないが、『栄花物語』では同様な「殿」呼称は、歴史の流れによりまた場面により様々な男性に使われていること、ただ道長一人にしか使われないのが「殿の御前」呼称であり、全部で二二二例あるという事実のみを報告した。

では、どうして道長だけに「殿の御前」呼称がなされているのだろうか。結論を先に言えば、物語として作られた小さい〈場〉から要求される呼称と、作品を総括していく際の、いわば作者の〈場〉といった側からなされる呼称というものには違いがあり、後者が関係しているらしい。呼称は、物語に生成したある種の中心軸というものに関与し、逆にそこから移動した場面内の小さな視座も明示するものである。編年体という一本の棒で括られた感のある物語だが、呼称というものを通して見ると、原資料があったとしても、作者その人を通過してなされたものであり、物語世界の遠近法がおのずとはたらいていることが判明する。

以下、道長をめぐる呼称を中心に考察することで、栄花物語の歴史語りの様相について究明したいと思う。道長の社会的地位により呼称は変化するので、呼称の変遷、呼称確立後の巻々における呼称に分けて分析し、最後に『栄花物語』特有の表現について考える。

一、道長の呼称の変遷と「殿」呼称の確立

まず、巻二から巻四までを眺める。巻二で初めて道長は三人兄弟として登場、巻三では個人として扱われ、官職の移動とともに呼称が変化し、巻四の末尾近くに一の人として「殿」呼称が生まれるまでの様相である。大きな歴史の流れを追いながら、それぞれの表現磁場から道長像をきちんと形成していく過程がうかがえる。

巻二「花山たづぬる中納言」では、すでに指摘されているように、父兼家の雌伏期にあたり、道長は兄達と一括りで紹介される。呼称の全用例をあげると、以下のようになる。（道長を指す部分に傍線を付け、注意したい敬語に点線を付した。以下、本文は『日本古典文学大系』上・下による。なお、下巻のみに、ページ数の上に「下」と記した）

1家の子の君達出でまじらひ給はず、世をあさましきものにおぼ

されたり。（七六頁）

2御はらからの君達この頃ぞつゝましげなうありき給める。（七八頁）

3御はらからの君達、年頃の御心地むつかしうむすばゝれ給へりける、紐とき、いみじき御心地どもせさせ給。（八一頁）

4女御の御はらからの君達などもまいてさし出でさせ給はず。（八二頁）

5男君達、この女御達の御はらから三所ぞおはします。…「この君達のおはせざらましかば…」…はかなき歌ども聞えさせ給はんとて、この男君達…（八三頁）

6男君達すべてさべきことゞもにも出でまじらはせ給はず。（八六頁）

7この家の子の君達、いみじうえもいはぬ御けしきどもなり。さて相撲などにも、この君達参り給。（八九頁）

巻二では、道長という個人ではなく、「家の子の君達」「御はらからの君達」として、兼家、詮子・超子との関係性から、兄弟といつも「君達」という三人ヅレで描かれていた。なお、兄の道隆・道兼も単独の登場はまだない。

巻三「さま〳〵のよろこび」。兼家の孫一条天皇が踐祚し、同じく孫（超子腹の居貞親王）が立太子、兼家は摂政となり、一条天皇の母詮子は立后したと、巻頭にまっさきに記し、続いて、道隆・道兼・道長の三人の兄弟が、

8家の子の君達、后の一つ御腹のは三所ぞおはする。まだ御位ども浅けれど、上達部になりもておはす。一つ御腹の太郎君は、…中納言になり給ひて、…。二郎君は、…宰相になり給ぬ。三郎君は、四位少将にておはしつる、三位中将になり給ぬ。（一〇三頁）

はじめて個人として登場し、それも太郎（道隆）・二郎（道兼）・三郎（道長）それぞれが「上達部」として紹介される。史実では、道長の従三位は翌年の九月二十日のことであるし、中将に任じられたこともないのだが、上達部として三人ヅレで兄弟を位置付けたかったものらしい。その三人ヅレ手法は、史実離れと以後の書き方から、道長その人に焦点が当てられたからということができよう。この後、道長は三位中将として登場してくるのだが、次の記事9も、三人ヅレでそれぞれの人柄・容貌・家族などが紹介された部分にあり、道隆・道兼に関わる本文はすべて省略したが、三人を並記するかたちで述べる。

9五郎君三位中将にて、御かたちよりはじめ、御心ざまなど、…道心もおはし、わが御方に心よせある人などを心ことにおぼし顧みはぐゝませ給へり。…后の宮も、とりわき思ひきこえ給ひて、我御子と聞え給ひて、（一〇六頁）

道長の人となりが三人の中で、容貌・思慮・人望において最もすぐれて、そして姉である帝母詮子にも格別に愛されていると物語る。

道長が左大臣源雅信の娘倫子に求婚しはじめる頃になると、それまでの「君」から地の文に「殿」という接尾語が付くようになる。

10かゝる程に、三位中将殿、土御門の源氏の左大臣殿の御女二所、…この三位殿、このひめぎみをいかでと心深う思ひきこえ給ひて、けしきだちきこえ給ひけり。（一〇九頁）

11母上例の女に似給はず、…「などてか、たゞこの君を聟にて見ざらん。…この君たゞならず見ゆる君なり。…かくてこの母上、

この三位殿の御事を心づきにおぼして（一〇九頁）

たゞこの三位殿を急ぎたち給て、婿どり給ひつ。…いとかひあるさまに通ひありき給ひける程なく、左京の大夫になり給ひぬ。（一一〇頁）

道長の求婚に対して、倫子の母親が道長の人となりを認め、倫子の婿となることが許されたとある。まもなく、官職が「左京大夫」となった。なお、土御門左大臣雅信女倫子との結婚は、二人の兄達と違う格式のあるもので、

12「この殿は、いとゞ物清くきらゝかにせさせ給へり」と、殿人も何事につけても心ことに思ひきこえたり。（一一〇頁）

12'…世の人、この三位殿をやむ事なきものにぞ、同じ家の子の御中にも人ごとに申し思ひためる。（一一七頁）

と12で、兼家の家人にも一目置かれるようになる。それは、12'で世間の人に三人の兄弟の中で最も衆望があることを記す記事につながるものである。[5]

結婚してまもなく、「左京の大夫の殿の上」倫子は懐妊し、「三位殿」も喜ぶなか（一一一頁）、無事に女の子が誕生する。その記事は、

13かゝる程に、この左京大夫殿の御上、けしきだちて悩しうおぼしたれば、…（略）…めでたきをんなぎみ生れ給ひぬ。（一一三頁）

と倫子を「左京大夫殿の御上」と呼称する。倫子を「御上」というのは、ここのみであり、これは後に後一条・後朱雀天皇の母となる彰子　が誕生したことを特筆するためのものらしい。見過ごしがちであるが、『栄花物語』作者は、この程度の表現である種の重み付けをするらしい。巻二においても、用例3、4、5、6の三兄弟に、二重敬語「せ給ふ」が使われていた。栄花物語の敬語法について、松村博司氏は、所属する階層においての差違を認められつつ、道長室倫子を例として「ある巻のある箇所における人物の扱いと、全巻的な階層別とは必ずしも一致しないし、ある場合には恣意的というよりほかないような使用法も見られる」と言及され、また、「ある箇所においてある人物を主人公格としてややまとまった物語風の記述を行なう場合にあっては、その人物やそれに関係のある人物を、他の箇所においてよりもいっそう丁重に待遇する傾向があるということも考えられるので、…」とも述べられた。[6] 4、6については、殿上人の身分であるのに二重敬語があるのが不審であるから、新編日本古典文学全集（以降、新編全集と略称）の現代語訳では使役の意味で解釈しているが、私はここを二重敬語と解したい。確かに栄花物語にありがちな「恣意的」な用法とも読めるが、むしろ松村氏が指摘された「主人公格として」「それに関係のある人物を」「丁重に待遇」したものと読んでみたい。つまり、3では、今上一の宮誕生により、その母女御の兄弟たちが二重敬語で印象付けられたものと解する。そして続く4・6は、円融天皇が一の宮の母女御詮子をさしおいて時の一の人頼忠の女遵子を立后させるという噂を聞いて、4では詮子の兄弟たちは憤慨して自邸に閉じこもったとあり、6も遵子立后を目にして姉超子急逝のこともあり、やはり兄弟たちは参内しなくなったというものである。4や6の二重敬語でもって、君達の行為をもっともなこととして共感する語り口になると言えよう。道長らの行動を了解していく、ある種の重み付けの二重敬語と考えたい。ささやかな敬語表現ながら、ある種の印象付け・格上げを行い、道長らの行動をもっともと是認する語り手の息

づかいがうかがえる箇所なのである。5は、謙譲語が加わるが、超子薨去記事の中で兄弟らも二重敬語が選ばれたとみたい。

物語る方向性から敬語が選びとられ、その差違の作り方は、巻三においても顕著である。

14いとゞ三位殿はおぼしわくるかたなう、（倫子と）水漏るまじげにて過させ給程に、…この左京大夫殿、その御局の人によく語らひつき給ひて、…（源明子と）むつまじうなり給にければ、…おろかならずおぼされつゝありわたり給。（一一三～四頁）

14では、道長と倫子の夫婦仲と、道長と新たな妻明子との仲とを物語る際に、敬語の使い方に違いを見せて、倫子とのまじらいは二重敬語で、倫子の妻としての高さを印象付けている。無論敬語は決して一面的に処理しきれないものであり、次のように身分相応の敬語がつく場合も多いのだが。

15さて臨時に除目ありて、摂政殿太政大臣にならせ給ぬ。殿の大納言殿内大臣にならせ給ぬ。中納言殿は大納言になり給ひ、三位殿は中納言にて右衛門督かけ給つ。（一一八頁）

15では、兼家父子の昇進が記されるが、兄弟のうち道隆の任内大臣のみに二重敬語が付き、弟二人は一重。道長は、ここで「中納言右衛門督」となる。

物語では、ほどなく兼家が出家し、道隆がそのあとを継ぎ、摂政となる。道隆女定子が立后して、道長は、新たに、

16中宮大夫には、右衛門督殿をなしきこえさせ給へれど、（一二二頁）

と中宮定子の大夫となる。まもなく、兼家は薨去し、道隆の時代がやってくる。

巻四「みはてぬゆめ」になると、時代は兄たちの道隆・道兼の政権時代となるが、道長は、まず大納言になり、以降、官職の異動を明記してたどり、最終的には、兄達の相次ぐ薨去で、一の人となり、「殿」呼称が確立される。

道長に対して、任大納言（17）とともに、この後は二重敬語で待遇していくことが多くなる。巻四では、敬語法の面では、倫子と明子の格差（18）、道長と身分は上の伊周との格差（19）に注意したい。[7]

17中宮の大夫は[8]大納言にならせ給ひぬ。（一三二頁）

18中宮大夫殿は、土御門のうへも、宮の御かたも、去年よりたゞならず見えさせ給へば、（一三三頁）

大納言どのは、土御門の上も宮の御方も、皆男君をぞ生み奉らせ給ひける。…とのゝ若君をば、たづ君と［ぞ］つけ奉らせ給ける。宮の御方をば、院の御前の乳母とりよろづに扱ひ知らせ給て、いはぎみとつけ奉り給へり。（一三九頁）

19かくて小千代君内大臣になり給ひぬ。御年廿ばかりなり。中宮大夫殿いとことのほかにあさましうおぼされて、ことに出で交らはせ給はずなりもてゆく。（一四〇頁）

さて、左大臣雅信は娘倫子の出産を待たずに亡くなった。世間の疫病流行を心配したものの、無事女君（妍子）が誕生する。そういう土御門や入道殿兼家の物語圏内では、それと言わずとも道長とわかるので、「大納言殿」呼称で進んでいく（一四〇～一四一～一四二頁）。疫病の流行で、道隆も亡くなり、公卿たちも次々に亡くなって、道長は左大将となる（20）。道兼は伊周を押さえて、道隆のあとを継ぎ、道長は満足する（21）。

20中宮大夫殿、この御代りに左大将になり給ひぬ。（一四六頁）

21大将殿も、今ぞ御心ゆく様におぼされける。…左大将殿日々におはしましつゝ、あるべき事どもを申掟てさせ給。（一四八頁）

道兼が病気となり、道長は心配するが、道兼もあっけなく亡くなる箇所では、「大将殿」「左大将殿」（一四九～一五〇頁）として登場する。そして、いよいよ、

22この粟田どのゝ御事の後より、五月十一日にぞ、左大将天下及び百官施行といふ宣旨下りて、今は関白殿と聞えさせて、（一五二頁）

と道長が政権を掌握し、「関白殿」となる。なお「左大将」は宣旨の中の呼称。続いて、

23大将殿は、六月十九日に右大臣にならせ給ひぬ。（一五二頁）

道長は大臣職にもつき、その後は道頼薨去を悼む場面（一五二頁）や、公季が娘を入内させる場面など（一五五頁）で、「関白殿」と記される。そして、やっと、伊周の恋敵花山院に対して弓で射るという事件を起こしたところで、

24これを公にも殿にも、いとよう申させ給ひつべけれど、…殿にも公にも聞しめして、（一五六～七頁）

道長に初めて、地の文で単独の「殿」呼称がなされる。一の人としての誕生である。

道長の「殿」呼称は、巻三の用例12に見えるが、12は兼家家内の従者による会話文内のもので、地の文ではない。巻四の用例18に、頼通を「とのゝ若君」としたり、倫子を「土御門殿の上」（一四一頁）とする呼称が見えるが、この「殿」は、道長を指すものではなく「土御門殿」（雅信邸）の「殿」を意味するものである。こうして、24の後、道長に対して、

25（尊子入内に）はかなき事なども左大臣殿用意しきこえ給へり。[9]（一五八頁）

と「左大臣殿」という呼称が見えるが、この例を最後にして、もはや巻五からは道長が官職名で呼称されることはなくなる。「殿」という一の人の呼称は確立したと見てよい。

二、道長の「大殿」「殿の御前」呼称の開始

巻五「浦〳〵の別」に入ると、道長を「殿」呼称する例（一八二頁、一八五頁、一九〇頁、一九一頁）に加えて、「大殿（おほとの）」で呼称する例が見えはじめる。「大殿」呼称について、木村由美子氏は、『栄花物語』では「藤原忠平、同兼通、同頼忠、同兼家、源雅信、藤原道隆、同道長、同教通の八人がこう呼ばれている」と指摘し、それぞれの呼称を示しつつ、源雅信と藤原教通の場合は私的な家関係の場面でよばれているが、あとの六人は「政権を掌握してから使われ出す」といい、一の人となっても大殿と呼ばれなかった人もいるし、他の呼称が使われないわけではないが、「辞書の提示する範囲よりも狭い定義感覚で扱っているようだ」とまとめられた（「栄花物語の人物呼称―伊周夫妻の贈答歌によせて―」『古典和歌論叢』昭和63年）。雅信・教通に関しては大臣殿の意かという懸念は残るが、そのとおりと思われる。

巻ごとに政権掌握者の「大殿」呼称を整理すれば、巻一の忠平、巻二の兼通・頼忠、巻三では兼家、巻四に道隆（死後のみ）、巻五以降の道長となる。道長の「大殿」呼称には、単なる一の人の意味に、あるニュアンスが加わるように思われる。

26…女院も内も、遥なる御有様をいとゞ心苦しう覚しめして、大殿にも猶、「ことよろしかるべく」など、院に切に申させ給て、

（一七一頁）

27かくて内に参らせ給夜は、大殿、さるべき御前参るべきよし仰らるれば、皆参りたり。殿の御心様のいみじうあり難くおはします事限りなし。（一八五頁）

28…内の御心をくませ給へるにや、大殿、七日夜の御事仕うまつらせ給ふ。（一八九頁）

29御湯殿の鳴弦や読書の博士など、皆大殿にぞ掟て参らせ給へる。大殿、「同じき物を、いときららかにも…。（一八九頁）

30兼資朝臣の家に中納言上り給へれど、大殿の源中将おはすとて、此殿（隆家）のおはしたるを、父は更によからぬことに思て、いみじう忍びてぞおはしける。殿（道長）の源中将と聞ゆるは、…今一所は殿の上（倫子）の御子にし奉らせ給なりけり。…此源中将の母は、大殿の上（倫子）の御異腹からの御子也ければ、…。（一九一頁）

26のように、「殿」ではなく「大殿」と呼称する際には、政権掌握者である意味をことさら付与して、伊周の召還も彼の返事しだいといっニュアンスを添えることができた。逆にそれを避けたいので「殿」を選ぶ場面もある。また、27、28、29の例では、定子の参内や出産の場合に、本来世話をするのは兄の伊周であるが、彼は左遷されたままで不在であるので、定子の世話をする者が他ならぬ一の人道長であるという、伊周と誤解されない意味付与もある。また用例30のように、ここは「殿」では隆家と同じになるし、道長以外の人が予想される場面であり、他人と識別する「大殿」呼称である。なお、「大殿」のあとでは、27・30のように単に「殿」呼称されることが多い。

巻六になると、道長を「大殿」とする例は、巻頭に先ずあらわれ、

31大殿の姫君十二にならせ給へば、年の内に御裳着有て、やがて内に参らせ給はむと急がせ給。（一九九頁）

中関白家の物語であった巻五と一変することを巻六巻頭で明示し、一の人道長の女彰子がやっと成人して入内することが示された。続いて、入内屏風の歌を身分高い人々に依頼したとあり、

32和哥は主がらな南、をかしさは勝ると云らむやうに、大殿やがてよみ給。（一九九頁）

道長も詠んだとするのは、他人と識別する意味の「大殿」であろう。巻六では「大殿」の用例はもう一例のみ（二〇四頁）で、ここも、一の宮を連れての定子入内に、本来なら一家の伊周が行うべきものを、道長が車や人を提供する場面に見える。

巻六には、道長を「殿の御前（とのおまへ）」という呼称が初めて出てくるのだが、その例を全例あげる。

33女院にも、藤壺の御方をば、殿の御前の、院にまかせ奉ると申そめさせ給しかば、いとやむごとなく…（二〇四頁）

34さて日此おはしませば、殿の御前、今宮を見奉らせ給て、抱きもちうつくしみ奉らせ給ふ。…哀に見奉らせ給。上の御笛を取らせ給へば、いとゆゝしううつくしう見奉らせ給。（二〇五頁）

35…殿はともかくもの給はせぬに、…されば、殿の御前、「右近内侍が参らぬこそ怪しけれ。……」などの給はせけるしもぞ、中〳〵「げになめう覚しめしけり」など、（二〇九頁）

それぞれに意味付与があるらしい。33の例のように、女院に対して、入内まもない娘藤壺（彰子）をゆだねるという、血縁関係はありながら身分の高い人々との交わりや、同じ上つ方でも、34の例のよう

に、定子が今宮（敦康）を連れて内裏に入り、一の宮がはじめて祖母の女院や父一条天皇と対面を果たして家族のなごやかな再会のただ中に、部外者ともいうべき道長が交わっていくのだが、その際に権力者「大殿」でもない「殿の御前」呼称で待遇することで、ある種の重み付けを果たして、この場面に道長を調和的に参入させている。いわば他の登場人物と拮抗できる重々しさが呼称に付加されていると言えよう。逆に35のような例は、道長が面白からぬ感情を抱く相手は、右近の内侍という一介の女房。二人の身分の懸隔を表わしつつ、「殿の御前」の「のたまふ」内容がクローズアップされる。ただし、このような身分低い相手の使用は、正編中に数例のみ。

「殿の御前」と「殿」の表現差がきれいに解けない部分も無論多いのだが、「大殿」「殿の御前」に付加された意味はほぼ以上のタイプになる。

三、巻々における道長呼称

道長の呼称を整理すると、「殿・大殿・殿の御前」という「殿」がつく呼称系統と、その他の「御堂」「入道殿」と呼ぶ場合とに分けられる。それぞれの用例数を数えて表Ⅰを作成した。[10]

表を一覧してわかるのは、「殿」系統では、「殿」「殿の御前」呼称は、開始後それぞれ一巻を除いてほぼ全巻にわたっているのに対して、「大殿」呼称は政権掌握と深く関わっている呼称のためか、道長が出家する巻十五では用例がなく、以降、巻十六の三例を数えるが後は極端に数が減少し、用例のない巻々が多くなる。道長が頼通に摂政を譲ったのは巻十三の終わり近くだが、『小右記』の記事でも有名なように、世間では致仕の大臣道長を「大殿」と呼び力を

［表Ⅰ］

巻	名	殿	殿の上	の官職	大殿	の人物	殿の御前	御堂	入道殿
5	浦〳〵の別	2	1	1	6	1			
6	かかやく藤壺	4			3		3		
7	とりべ野	18	4	1	1		2		
8	はつはな	51	15	4	7	2	19		
9	いはかげ	8					8		
10	ひかげのかづら	8			9	2	9		
11	つぼみ花	7	3	3			6		
12	たまのむらぎく	14	3	3	12	2	12		
13	ゆふしで	6	2		6	1	8		
14	あさみどり	12	3	1	4	1	9		
15	うたがひ	6					8		
16	もとのしづく	6	2		3	1	8	2	3
17	おむがく	1	1	1			13		2
18	たまのうてな	2					9	1	
19	御裳ぎ	2	2		2		8	1	
20	御賀	1	2				4		
21	後くるの大将	3					5	1	
22	とりのまひ	1	1		*1		3		2
23	こまくらべの行幸						3		1
24	わかばえ	1	1		2			2	3
25	みねの月	10					10		3
26	楚王の夢	25					25	3	1
27	ころものたま	1	2			*1	12	6	2
28	わかみづ	2	1				5	15	
29	たまのかざり	8	3				20	2	
30	つるのはやし	10	3	11	56	11	13	33	17
		209	49				222		

注1＊印を付けた巻二十二は、道長を「大殿の御前」と呼ぶが、便宜上ここで数えた。また、巻二十七で藤原兼隆を「大殿の左衛門督」とするのは、誤写説もあり、祖父兼家の猶子とも考えられるが、道長養子と推定して数に入れることにした。

注2巻二十七の「入道殿の、院の女御・尚侍と月ならびに失ひ奉り給へりし、いみじけれど、宮〳〵数多おはしまし、さるべき君達などものし給ふ」（下・二五九頁）の箇所を、「道長の子の院の女御」と解釈されている（『栄花物語全注釈』五、『新編全集』）が、斉信が子を失った親を列挙する会話文であり、敬語法からも傍線部の「の」は主格と解釈したい。

注3「殿の上」は、倫子を指す。倫子の呼称は、他に、道長の「殿」と関わらせて、「殿の上の御前」が巻十一と巻十七とに各一例、巻二十九に二例あり、「殿の上の御方」が巻十七に一例見える。

注4道長以外に「殿」呼称をされる人物について、各巻で「邸」も加えて整理すると

以下のようである。その記事周辺は、それぞれ、物語として括られた、力をそそいだまとまりある場面が構成されている。

1月の宴……実頼1　高明1・邸1　済時1
2花山たづぬる中納言……伊尹1　兼家5・邸3　朝光3　頼忠1
3さま〳〵のよろこび……兼家5・邸1　道隆1・邸1　道兼邸1　雅信2・邸1
4みはてぬゆめ……道兼9・邸5　道隆4・邸1　伊周2　雅信1・邸1　済時1
5浦〳〵の別……伊周9・邸7　道隆2　兼家1　顕光1　降家1
8はつはな……伊周4　顕光2　隆家1
10ひかげのかづら……公任1　顕信1
11つぼみ花……顕光1・邸1　斉信1
12たまのむらぎく……頼通3　道隆2
13ゆふしで……頼通邸1　顕光5
14あさみどり……行成3　伊周1　頼通邸1
16もとのしづく……顕光15・邸2　実資4　公任2
21後くゐの大将……教通15・邸4　頼通1　公任1　斉信邸2　行成邸1
23こまくらべの行幸……頼通3・邸（高陽院）5
24わかばえ……頼通5・邸1　教通1
27ころものたま……斉信4　長家・教通・公任各1
28わかみづ……兼隆邸2　頼通1
29たまのかざり……教通1
30つるのはやし……行成6・邸1　長家1

行使していたわけだが、栄花物語では出家後にこの呼称はとらなかった。

また、後世「御堂」とか「入道殿」で、道長を指し彼の固有名詞のように使われるが、栄花物語では、たとえば「御堂の上」とか、「入道殿の大納言」とかいう例がないように、道長を指示する呼称としては、ごく限られてくるようだ。

以下、二系統に分けて考察したい。

1「殿」「殿の御前」「大殿」について

出家後の道長を「大殿」と呼ぶのは、もう一人の「殿」とまぎれないようにするための場面に限定されていくようだ。

巻十六における「大殿」の例は以下のようである。

36かくて九月ばかり、大とのゝ上、一条殿の尼上をば、観音寺といふ所にこそは斂め給ひしか、それをこの頃、…（下・二九頁）

37こたみは大殿（よろづ）いみじうおぼつかなう心もとなうおぼされて、たゞ関白どのゝ御女とてこそは、…（下・三四頁）

38年頃大とのゝの御子のやうに思ひきこえ給へりければ、御方〳〵に皆内外し給へるうちにも、皇太后宮（妍子）には…（下・三六頁）

36に道長室倫子を「大殿の上」とするのは、それまでの物語が左大臣顕光の女延子の死関連の場面が続いており、顕光に「殿」呼称が行われていたので、それとまぎれないためのもの。37では道長女嬉子の東宮参りに関わる記事で、道長は出家した身なので自身は後見できずに頼通に依頼し、また頼通女として入内させたとあり、関白頼通と誤解されないための呼称であろう。38は、源経房の大宰府赴任のことを述べ、経房が誰の養子と明確にする意味であろうし、皇太后妍子とのからみで語る場合には、頼通と誤解されないようにする必要もあったであろう。

巻十九「御裳ぎ」の「大殿」呼称は、次女皇太后妍子腹の一品宮禎子内親王が着裳する準備等に関わる記事中であり、巻二十四「わかばえ」に頼通に初めての子通房が誕生した記事にも「大殿」とあるが、ともに祖父たる意味付けがなされた場面であり、かつ、関白頼通との識別の意味があろう。

それでは、道長一人にしか使用されず、出家後も用例の多い「殿の御前」呼称との使い分けはなされているのだろうか。道長が政権担当者であった時代で、用例数がほぼ同じである巻十を検討してみたい。まず、巻十の内容を、道長呼称の分布を見るために、新編全

集の小見出しとその番号で示して、その呼称を大系で示した。

①三条帝即位の儀……おほとの
②冷泉院の病悩……殿の御まへ、おほとの
③冷泉院崩御……おほ殿
④長和元年年頭
⑤三条帝と娍子の贈答歌
⑥人々の一条院追想……とのゝ御前
⑦妍子の立后……殿、大殿
⑧娍子とその周辺……殿
⑨道長の奏上により、娍子の立后決る……大殿
⑩娍子の立后……大殿
⑪三条帝と娍子の贈答歌
⑫彰子の有様
⑬大嘗会御禊……大殿
⑭大嘗会、悠紀・主基の風俗和歌
⑮妍子の懐妊……殿のおまへ、殿の御まへ、殿の御まへ
⑯長和二年年頭
⑰妍子、東三条院に退出……との
⑱道長男顕信の出家……殿、「大との」、「殿」、大殿、殿のおまへ、
⑲道長、顕信と対面……殿、殿のおまへ、とのゝおまへ、殿
⑳娍子の内裏参入……殿のおまへ
㉑道長男教通、公任女と結婚……大殿、「殿」、大殿
㉒妍子の有様

呼称はちらばり、一見、小さな物語単位による偏りはないように見える。道長登場を物語の内容と人物関係から整理すれば、①②③は三条天皇の即位にともない道長はまた一の人として関与するが、即位後まもなく父冷泉院の病が重くなり、道長が見舞い、行幸を言い出す三条天皇を行幸をやめるように進言する部分である。天皇をいわば後見する場面には「大殿」を使い、冷泉院を見舞うが精神の異常さに驚きおそれる私的な感慨を表出した箇所では「殿の御前」となる。妍子関係の登場では⑦⑬⑮⑰に道長は登場するが、⑦の道長の兄道綱が中宮大夫になる時の系譜説明と、⑬で女御代になるのが噂のあった二人のうち妍子がなった、という人物を明記するために「大殿」が選ばれた。⑮は、妍子懐妊を案じ、嬉しく思い、いたわり祈りを開始する部分には「殿の御前」が続けて選ばれた。娍子関係では⑧⑨⑩⑳の記事。三条天皇が立后を道長に言い出せない箇所⑧では「殿」（同じく三条帝から妍子立后のことを言い出した⑦でも「殿」）、意を汲んで道長から奏上する場合は⑨「大殿」、⑩娍子を「女の幸」と世人が噂し、道長も口にする場面も「大殿」となり、⑳で三条帝の意を汲んで娍子の参内を進言する場合には「殿の御前」となるのは、「大殿」では、権力者の意味付けが加わりきつくなるためのものか。道長男顕信の出家に関わる⑱⑲は、⑱顕信との区別で「大殿」が選ばれ、会話文中では出家させる皮聖側から「大殿」、顕信側からは「殿」となる。ところが、道長が出家した顕信のもとを訪れ、子を目の前にして「泣く」「泣く泣く」と涙する場面では「殿の御前」となる。道長男教通の結婚関係記事の㉑では、教通や妻の父の公任と、道長とを区別するために「大殿」呼称が選ばれたらしい。

なお「殿」呼称については、意味を特定できるものが少なかったり、「大殿」「殿の御前」でもよい場合に例が見えるのは、「殿」が

ベースになる敬称だからであろう。

2「御堂」と「入道殿」呼称の偏差

後世「御堂」「入道殿」と称された道長だが、物語中そのように呼称されるのは、「殿」系統の呼称に比べて限定されるようである。まず「御堂」の例を幾つかあげる。

39［長家室行成女の葬送］中将の君の御後めたさに、御堂よりも高松殿よりも頻に御消息あり。（巻16　下・三九頁）

40［長家、斉信女と再婚］…御堂にもめ安く見奉らせ給ふ。（巻16　下・四九頁）

41［土御門で彰子歌会］かゝる事を聞しめして、御堂より奉らせ給へる、（巻19　下・一一七頁）

42［教通室の死に］蔵の命婦参りて、御堂の御消息、上の御事や、よろづに聞え慰むれど、（巻21　下・一三六頁）

43［枇杷殿大饗に］「今御堂に今日の事ども問はせ給はゞ、……」…。…又の日、御堂より、「関白殿とく参らせ給へ」とあれば、（巻24　下・一八一頁）

44［公任剃髪］…御堂に、…御消息ものせさせ給へば（巻27　二五七頁）

それぞれの用例中、［　］内に示したように、物語られた〈場〉が、道長本人の家でない、いわば道長の外部にある例ばかりである。39では長家の室が亡くなった行成家を中心的な場とし、40は長家が再婚した相手先の斉信邸が中心にあり、41では土御門第での彰子歌会が物語の中心であり、42では教通の家に、43では妍子が大饗を催す枇杷殿に中心がある。44では教通室の死後に公任が出家した物語がなされた場面にあり、長谷に〈場〉がある。道長子女たち関係の記事であるが、子女たちの方に物語の中心が移っている例である。

そのもっとも顕著な例が、「御堂」の例の最も多い巻二十八の「わかみづ」と、一巻をあげて、阿弥陀堂で道長が死を迎える物語を記した巻三十「つるのはやし」である。後者は「御堂」の語例は多いが、道長はそこにいるから「御堂」と呼称されないのである。逆に、巻二十八に突出しているのは、すべて「一品宮」禎子内親王に関わる例である。枇杷殿より東宮に入内するが、その準備から当日、そして内裏弘徽殿での生活が描かれるが、孫娘を案じて、いろいろな配慮を御堂から送り、一喜一憂する道長はいわば外部にいるので、「御堂」呼称なのである。

「入道殿」の例も同様に見てみよう。

45入道殿は、御堂の西によりて阿弥陀堂建てさせ給て、（下・二九頁）

46［大宰府から上京した隆家は］いみじき唐の綾錦を多く入道殿に奉り給て、御堂の飾にせさせ給ふ。（下・三〇頁）

47中将の君もろともにと出で立ち給へど、入道どのゝ御忌の日なりければ（下・三九頁）

巻十五で出家して、巻十六に最初に登場するのは、45「入道殿」としてであり、続く呼称も46の御堂供養に関わる「入道殿」である。巻十六では、47までの記事に、道長女嬉子が頼通の養女として東宮に参るが、そこでは「大殿」「殿」呼称が行われ、47以降に妍子女房の法華経供養の記事があるが、そこでは「殿の御前」「殿」呼称がある。きれいな分布を見せるといってよい。その他「入道殿」の例では、

48［御堂供養に行幸あり］入道殿別に居させ給へれば、…。上の御前、仏の御前に参らせ給ひて拝（ま）せ給へば、入道殿見奉らせ給ひて（巻17　下・六六頁）

49［祇陀林寺にて舎利会］小一条院・入道殿などの御棧敷をはじめ、…、被物、入道殿御棧敷より、（巻22　下・一五一頁）

50［高陽院に行幸］入道殿は、東の対の北によりて文殿あり、そこに（巻23　下・一五八頁）

51［頼通妾、対の君懐妊］関白殿、年頃御子といふ物持たせ給はぬ歎きを、入道殿・上までにおぼしめしたるに、（巻24　下・一七一頁）

巻十七48では、後一条天皇の行幸を、出家後道長がはじめて迎えるもので、「入道殿」をことさら選んだもの。巻二十二49の例は祇陀林寺という外部、巻二十三50も頼通邸の出来事で外部であり、出家した道長はこの時ある意味で部外者ゆえの表現と思われる。巻二十四51も、頼通を「殿」呼称した場面の中にあるもので、頼通に中心がある。「入道殿」の呼称も出家直後はともかく、その他は物語の中心的な立場の時には使用されない。

以上のように、呼称は物語をいかに場面として形成していくかによって選びとられていると言うことができよう。「御堂」「入道殿」は道長を指す第一義の呼称ではなく、「御堂の〇〇」「入道殿の〇〇」と子女たちが表現されないのは、むしろこの物語の作者にとって呼称として選びにくかったものであろう。「入道殿」の用例が、男性の会話文中にあり、多くの例が他の男性と並列であったり、相対する場面で使用されていたのは、女性の書き手としての敬称にはなじまなかったか。また「御堂」も呼称としては、熟さない言葉であった。道長一家に従属する身分という事情がはたらけば、「殿」系統の呼称が多くなるのは自然であろう。

四、「殿の御前」呼称の位相

「殿の御前」表現は、『栄花物語』正編中、道長一人を指し示すが、「殿」という敬意にさらに「御前」という敬称を重ねる表現のあり方を考えたい。

巻八「はつはな」は紫式部日記利用で有名であるが、木村由美子氏は、初花巻と紫式部日記における道長及び倫子の呼称を比較した。そして、栄花物語の方だけに三例「殿の御前」呼称がなされていて、そのうちの次の例は、

52殿の御前、「宮を女にて持ち奉りたる、麿恥ならず。麿を父にて持ち給へる、宮わろからず。又母もいとさいはひあり、よき夫持給へり」など、戯れ宣はするを、上はいとかたはらいたしとおぼして、あなたに渡らせ給ぬ。（二七三頁）

日記にない「殿の御前」を挿入し、この辺りは「編者が加筆補訂した所でもある」（前掲論文）と指摘されている。あとの二例の「殿の御前」（二六一頁・二六七頁）も、日記の記事をつなぎあわせる箇所に見えるものである。

紫式部日記では、道長に対してほとんど「殿」呼称であり、行幸を迎えた「あるじのおほゐ殿」が一例の例外となる。木村氏が整理された巻八の道長・倫子の呼称の表を見ると、栄花では日記の文に「殿」を補ったり、日記の「殿」を「大殿」にした一例が見える。とすれば、「殿の御前」は栄花作者の選択した呼称と言ってよい。二二二例を数える「殿の御前」の中で、会話文中で用いられたのが

たった二例[11]というのも示唆的である。

『栄花物語』では、道長を指す「殿の御前」二二二例の他に、妻倫子を指す「上の御前」四六例がある。まずこの「○○の御前」という呼称について、整理してみよう。「殿の御前」「大殿の御前」以外の用例数と誰を示したものかは、次の通り。正編と続編とを比較した。

◎正編の例

上の御前…倫子＝46（他に「殿の上の御前」4）、一条天皇＝2、三条天皇＝2、後一条天皇＝3、妍子＝1

大宮の御前…彰子＝8、妍子＝2

子持の御前…嬉子＝3

姫宮の御前…禎子内親王＝2

一品宮の御前…禎子内親王＝1

宮の御前…妍子＝18、定子＝17（巻五のみの使用）、彰子＝9、詮子＝2、衍字（みやみやのおまへ）＝1、昌子＝1、娍子＝1、威子＝1、遵子＝1

院の御前…詮子＝2

内の大殿の御前…教通＝1

◎続編の例

内の御前…後冷泉天皇＝1

女院の御前…彰子＝2、院の御前…彰子＝1

姫宮の御前…祐子＝1

殿の御せん…頼通＝1

内のこせん…後一条天皇＝1、白河天皇＝1

院の御せん…禎子＝1

「○○の御前」という呼称は、正編に突出している表現と言えよう。それも、一条・三条天皇と、定子・昌子・娍子・遵子という中宮や皇太后にのぼった女性を除いて、他は、道長本人と、その妻子、孫、それに姉の詮子に使用され、そして用例の大多数を占める。なお、中宮定子は十七例と例が多いが、巻五のみという特殊性がある。続編にいたると、数は減少するが、それと同時に頼通以外は、天皇および天皇の母、それに天皇の女という天皇家側の呼称となっている。頼通の「殿の御せん」にしても、たった一例である。なお、「ごぜん」は、「おまへ」の漢字表記「御前」から生まれたと推定され、院政期頃から見られると指摘されている（榊原邦彦『平安語彙論考』教育出版センター　一九八二年）。

ここで、『枕草子』『紫式部日記』の例を見たい[12]。

◎枕草子

宮の御前…中宮定子＝8＋1（御ぜん）

上の御前…一条天皇＝8

殿の御前…道隆＝1

三の御前…道隆三女＝1

◎紫式部日記

宮の御前…中宮彰子＝2

『枕草子』では、作品の性格上、自分の女主人中宮定子と夫帝一条天皇の例が多く、道隆を呼称する「殿の御前」はわずかに一例のみ。積善寺供養の章段であり、ここでの用法は、女院や中宮定子の間を行来している場面に使われ、高き交わりの中で、臣下の身分ながら、同等の交わりをする格上げの意味が付与されているものである。「三の御前」も積善寺供養の段である。『紫式部日記』に「殿の御前」

「上の御前」はなく、かろうじて「宮の御前」二例が見えるにすぎない。それも、

・「宮の御前、聞こしめすや。つかうまつれり」とわればめし給て、（二八四頁。本文は新日本古典文学大系による）

・宮の御前も、「いとうちとけては見えじとなん思ひしかど、人よりけにむつましうなりにたるこそ」とのたまはするをり〳〵侍り。（三一二頁）

前者は、道長の会話文中のもので、敦成親王の五十日の折、自身の祝の歌を、女彰子に呼びかけて自賛したもの。栄花物語では省略された用例52の前にある。もう一例は、消息文中のもので、中宮が紫式部を前に彼女に抱いた思いを吐露したもので、その主格となる部分。後者は、主従二人の間の隔差を表現していよう。日記の他の箇所では「宮」「御前」という、どちらか一方でしか記さない。

同じ紫式部の手になる『源氏物語』では、この「〇〇の御前」は『源氏物語語彙用例総索引』（勉誠社　一九九四年）に、「宮の御前」一例を立項しているのみ。

若君の御乳母の宰相の君して、宮の御前より、御消息聞こえたまへり。（「須磨」日本古典文学全集2―一六〇頁）

という、夕霧の祖母を指す例である。それでも、現代語訳を「大宮の御もとから源氏の君に」とあるように、「御前わたり」の意味をになっているのは、助詞「より」でわかる。ちなみに『源氏物語』では、「宮の御前」「大宮の御前（会話）」「若宮の御前（消息）」「院の御前」という語構成の表現はあるが[12]、主語となる例はなく、いつも「〜に（て・は）」「〜より」と続き、「御前」の本来的意味である、＜貴人の前わたり＞の意味を消すことはない。一語と認定されないのである。『紫式部日記』という主家顕彰の意味を負わされた作品であっても、地の文には「宮の御前」すら使わなかったが、それが紫式部の言語感覚であるらしい。

それでは、『栄花物語』が特殊なのか。次に、新編国歌大観のCD―ROM版で、和歌詞書における「〇〇の御前」の用例を見て、呼称と認定されるものの家集名をあげた。参考までに前述の散文作品も入れて、表Ⅱを作成した。

［表Ⅱ］

作品名	殿の御前	上の御前	宮の御前	院の御前	その他
栄花物語正編	222	54	51	2	略
栄花物語続編	1（御せん）		1（御せん）	1（御せん1）	略
枕草子	1（道隆）	8（帝）	8＋1		略
紫式部日記			2		
馬の内侍集			〜に1＊		
和泉式部続集					女院の御まへに1＊
御堂関白集			1（に1＊）		若宮の御前に1＊
赤染衛門集	6				
弁乳母集					姫宮の御前1、春宮の御まへに1＊
伊勢大輔集	1				
皇后宮春秋歌合		1（帝）	御せん1		

注　＊印は、「御前わたり」の意味が強く残っているもので、呼称としにくいが参考としてあげた。その他、仲文集・公任集・為仲集などの「（中）宮の御前」は、「に」「より」に続き、それらは呼称ではない。

表を見ると、「宮の御前」という言い方はかなりの作品に使用さ

れている。「殿の御前」は、和歌関係にも『赤染衛門集』の六例、及び『伊勢大輔集』の一例のみ。ともに道長を指すのみ、という事実は注目できよう。現実に使用された呼称と考えてもよいであろう。また、「上の御前」は、天皇以外を指すのは『栄花物語』正編の道長室倫子しかない、というのも注目したい。

栄花物語という作品が、道長・倫子に対して過剰と言ってよい呼称を用いているのは、赤染衛門集・伊勢大輔集・弁乳母集のような、宮仕え女房が主人に待遇するのと同じ発想であるからなのだろう。それは、身分の差違を示す目的からではなく、道長・倫子を主人格とするところに作者が属しているから、としか言いようがあるまい。

栄花物語正編の「殿の御前」は、二例を除き地の文に使用されていると述べたが、作者の管轄下にある表現磁場なのかどうか。原資料は巻八以外には残されていないので、推定可能な例にしぼって検討してみよう。

「殿の御前」の用例にあたって第一に気づくのは、栄花物語の主題をになう表現部分でこの呼称が見えることである。

53たゞ同じくはと（同ジコトナラ男皇子ガヨカッタノニト）、誰も思さるべし。されど、東宮の生れ給へりしを、殿の御前の御初孫にて、栄花の初花と聞えたるに、この御ことを苔み花とぞ聞えさすべかめる。（巻11　三四六頁）

54とのゝ御前の（御）栄花のみこそ、開けそめにし後、千年の春霞・秋の霧にも立ち隠されず、…世にありがたくめでたきこと、優曇花の如く、水に生ひたる花は、青き蓮世に勝れて、香匂ひたる花は竝なきが如し。（巻15　四五七頁）

53では、敦成親王の誕生を「栄花」の「初花」（巻八の巻名）と表現し、禎子内親王の誕生を「苔み花」（巻十一の巻名）と表現するのは、作者の側に属するものであろう。54でも、やはり道長の「栄花」と表現し、世にもすぐれたその花が変じることなく、唯一無二のものであるという。「栄花」は、まさしく作品のタイトルである。

前述した54は、巻十五の末尾を閉じる表現であった。同様に巻三〇の作品全体の締めくくりともいうべき所で、

55とのゝ御前の御有様、世中にまだ若くておはしましゝより大人び、人とならせ給、公に次〳〵仕まつらせ給て、唯一无二におはします、出家せさせ給しところの御事、終の御時までを書き続けきこえさする程に、…（巻30　下・三三七頁）

とこれまでの物語全体を振り返って、いわば物語を総括する部分に、「殿の御前」とある。

この他にも、巻頭・巻末のいわば物語の始発と終りにあたる箇所に、「殿の御前」は使われている。巻十五は独立色の強い巻ではあるが、末尾の例（54）に加えて、巻頭でも開口一番に、

56とのゝ御前、世を知り初めさせ給ひて後、みかどは三代にならせ給ふ。我御世は廿余年ばかりにならせ給ふに、…（四三九頁）

今までの歴史を顧みつつ「殿の御前」とあって、これも作品をつなぐ作者の責任執筆部分と言えよう。巻々をつなぐという意味では、巻十七における法成寺の御堂供養は大盛儀であったが、すでに巻十六において、

57とのゝ御前、来年の大御堂供養の事を、今よりおぼしめしたり。（下・五三頁）

58御堂にはとのゝ御前、安きいも御殿籠らず、いみじうおぼし急がせ給ふ。（下・五七頁）

と、「殿の御前」道長の準備に余念がない様子が描かれているが、57、58ともに、前後と関係なくただ一文挿入されたもので、巻十七へのつなぎ部分と言ってよい。同じくつなぎ部分と言えば、巻二十九の巻末、娘妍子を亡くし自身も病でたえがたい思いの「殿の御前」を映すのも、道長往生譚ともいうべき巻三十につなぐものであろう（下・三一六頁）。

さらに、物語で何度も確認する出来事なども、事象をつなぐものと言ってよい。二例ほどあげれば、巻六の用例33で道長は女院詮子に娘彰子をゆだねるが、同様の文は、「院にはとのゝ御前の、この宮の御事を昔より心殊に聞えつけ奉らせ給へれば」（巻7　二二七頁）とあって、そこにも「殿の御前」とある。また、彰子に男皇子が誕生したのは、栄花物語では道長の御嶽詣での成果と信じられているが、その御嶽関係記事では「殿の御前」が繰り返される（巻八の二四九頁、二五三頁、二五五頁）。

ところで、和歌そのものは原資料性という性格の濃いものであろうが、物語に場を与えるときには詠み手を明記する必要があり、呼称を物語として整えていかねばなるまい。『栄花物語』における道長の和歌は総計十八首。用例を整理すると、「殿の御前」十例、「殿」四例、「御堂」二例、「入道殿」一例、名の記されないもの一例がある。

作者の責任部分という点では、いわゆる草子地がある。

59そのゝちとのゝ御前、七大寺廻にありかせ給。さま〴〵に御心の暇もおはしまさぬに、御有様の尽きせぬを、世の例に語り続け、書き置くべきにやと見えさせ給。されどかやうの折参り見る身は、心慌しうて、その儀式確かに見覚え難く、又音ばかりに伝へ聞く人、はたまいていかでかは。いと書き続け難げなる事どもなれば、たゞ片端許をだにとてある、ものまねびなるべし。（巻20　下・一二七頁）

自分の見聞のいたらなさから、十分に書き記すことができない旨の断りの草子地である。

むすびにかえて

官職名は朝廷より与えられたもので序列がある。『栄花物語』では道長が一の人となるや、巻五より官職名で呼称することがなくなるのは、臣下という枠を超越したところに道長を置いて待遇しているに他ならない。特に「殿の御前」呼称は、巻頭であってもどんな場面に移動してもなされるのだが、それが『栄花物語』では二二二例という多数に及んでいること、さらに、他にも「〇〇の御前」の例が多く、たとえば「上の御前」で、天皇を指し示すのはよく知られているが、他ならぬ道長室倫子本人を表わす例が圧倒的に多いという特殊性もある。また、他の「〇〇の御前」の用例が、道長女や孫に多いという現象の意味は重い。資料性云々よりも、むしろ栄花物語の主題性をになって、道長一家の物語としてまとめる意向がはたらいていたと推定したい。他の登場人物と識別させていく、作者自身の手になる、格付け、重み付けが作用していると思われる。絶対的避称同様に、栄花物語の道長中心という性格を呼称面からも支えているのだが、さらに、多くの登場人物の中で、道長一家の高き交わりを表出し、主家筋を呼称面からも讃仰していく姿勢が顕著であると言えよう。

（注）

1『栄花物語』には道長一家の実名呼称はないが、『大鏡』では、序で道長を中心に物語るといい、万寿二年（一〇二五）という道長生前に物語る時点を置きながら、列伝を立てる必要上「道長」という実名があり、系譜的な記述においては子息たちに、関白である頼通にも、内大臣教通・大納言頼宗・能信にも、むろん顕信・長家にもすべて実名がつく。道長には登場人物の会話文中にも「斉信・道長にわれはばまれぬるぞ」（為光伝）と、中納言につけなかった誠信の怨みのセリフとして実名が一例見える。同じ紀伝体の『今鏡』には、系譜記述であっても、実名を記さず絶対的避称で待遇する人物群がある。臣下では、忠通と、その子息たちで摂政基房・右大臣兼実・三位中将兼房ら、僧侶では恵信・覚忠・慈円他である。ただし、長男の摂政基実に実名があるのは故人であるからか。なお、畠山本には源顕房に実名呼称がない。嘉応二年という執筆時点が、絶対的避称をとらせたと思われる。歴史物語を記す時点が関係する。そういう意味では、『大鏡』の成立時期は、禎子内親王の帝母・陽明門院と予言されたのが実現した治暦四年・延久元年（一〇六九）以降に加えて、頼通没の承保元年（一〇七四）、教通没の承保二年（一〇七五）を経てのことと推定されているが、実名呼称という点からも了解される。石川徹氏の能信とその配下の者が作者という説は、主人を実名で呼称する点で考えがたいように思われる。栄花物語以外の作品の呼称に関しては、別稿に期したい。

2穂積陳重『実名敬避俗語の研究』（大正15年　刀江書院）に述べられたもの。絶対的避称に触れた、増淵勝一氏の論考「『紫式部日記』の人名呼称」（『並木の里』34　一九九一・3）、「清少納言の対人意識」（『並木の里』35　一九九一・12）の論考も参考となる。

3系図外では、（師輔の子の）遠量・遠基・遠度・忠君、藤原斉敏―懐平―資平、朝経、重家、誠信、相任、永頼、国章、挙賢、源重信―道方、平生昌、高階成忠。

4「第Ⅰ編栄花物語　第一章性格」（『歴史物語の思想』所収、初出「栄花物語の性格」『国語国文』昭和51年9月）

5 9 12'の記事は、新編日本古典文学全集注に「道長の栄華の物語へと据え直されていることの徴表」であり（一四四頁鑑賞注）、「九条流の発展が道長へと受け継がれることを予示する」（一六四頁鑑賞注）と注目されたものである。

6「栄花物語・大鏡の敬語」（『敬語講座2　上代中古の敬語』昭和48年）

7用例18は、子供たちに命名した主語を道長と解した。誕生したのが頼通・頼宗という点から、後の地位を及ぼした敬語の違いとも解釈できよう。また、「知らせ給ひて」の「せ」も解釈が分れるところであろうが、使役と解釈した。

8前後の文脈からは「中宮大夫殿」とありたいところ。「殿」の脱か。

9用例25の「給へ」は敬意が低く気になるところであるが、動作の及ぶ対象が尊子という軽い存在のためか。

10道長の呼称全例にあたったつもりである。この他に、道長を「殿の御方」と呼称する場合があるが、「御方」の意味が強いためか、『栄花物語本文と索引』（武蔵野書院　昭和60年）では項目を立てているのは次のアの一例のみ。イ・ウなども一語と言えそうだがこの稿では「殿」に入れた。

アとのゝ御方は、五大堂の辰巳の隅の方に、御簾かけておはしま

す。（巻29　下・三〇一頁）

イ［禎子内親王の裳着、大宮西の対へ渡御］殿の御方より「時なりぬ〳〵」と、度〳〵御消息あり。（巻19　下・一〇四頁）

ウ殿の御方より「時過ぎぬべし」とのみ申させ給へば、（巻19　下・一〇五頁）

なお、用例を整理するにあたって、『栄花物語本文と索引』を活用したが、「御堂」（道長）の項目には若干の誤りがあったので、修正してある。

11会話文の二例とは、巻二十一の法成寺僧房の焼亡にあたり類焼をまぬがれたのは、「『仏の御験、殿ゝ御前の御心の中の念の程を見せ知らせんとおぼして、仏神のおのづからあらせ給へる事に見えたり』など、…世人も申思たりける」（下・一四一頁）と道長を賛美している部分、及び、巻二十六の嬉子の薨去にあたって道長が無常を思うが、「『殿ゝ御前の今年はつゝませ給べき御年なれば、御命延びさせ給ふべきなめり。…』と、世の人申思へり」（下・二二一頁）と、真の出家心の発露は道長の寿命を延ばすとある部分。二例ともに物語を収斂しつつ繋いでいく部分にあり、両者とも単なる会話文以上の意味をになっている。

12榊原邦彦編『枕草子本文及び総索引』（和泉書院　一九九四年）、今西祐一郎他『紫式部日記語彙用例総索引』（勉誠社　一九九七年）によった。

（かとうしずこ）